BROADCASTING CREATORS' ASSOCIATION

放送人の会

No・17

2003・12・12 発行

〒102－0094 千代田区紀尾井町1－1 千代田放送会館 3階
TEL & fax 03－3321－0019 Email info@hosojin.com
代表幹事 大山勝美 編集担当 伊藤雅浩 松尾羊一

好スタートの二つの催し

大山勝美

十一月十二月とたてつづけに第一回目の催しが横浜情文ホールで行われ、いずれも好評の好スタートを切ることができた。

「地域のテレビ番組を語ろう～全国フォーラムin横浜」（十一月十一・十二日）は、立案から実施まで時間が少なかったにもかかわらず充実した内容で、参加者は十分に手応えを感じたようである。番組コンテストは、新鮮さと活力があり、討論と研究の部門では現状と課題がリアルに豊かに語られていた。

それにしても担当委員の方々の本番二ヶ月前からの作業量は凄かった。時折事務局を訪ねて扉を開けると、タバコの煙、汗くさい熱気、飛び交う言葉が渦になってワッととび出してきた。圧倒されて頭が下がった。みな少年のように眼が輝いていたのは、これはテレビ界にとって実益をもたらす意義ある催しになるぞ、という予感があったからに違いない。

中田宏横浜市長の挨拶「テレビ関係者だけでなく、横浜市にとっても重要な催しだ。大きく育てて行きたい」は関係者の疲れをふっとばした。

しかし続けるには、運営母体の構築から仕切り直しが必要であろう。今回の運営活動は、通常のボランティアのスケールを遥かにこえている。

ともあれ、田原委員長、松尾副委員長以下の委員の方々に感謝・深謝。そして拍手である。

十二月七日の「人気番組メモリー第一回小川宏ショー」。これもそのまま番組にしたいほど楽しく、内容も濃かった。まずは露木茂司会の冴え。仲間うちのトークなのに、なれあいの甘さがない。きちんとした快い距離があり、しかも暖かさが十分に伝わってくる。その手綱さばきのバランスは見事の一語につきる。

ワイドショーが何故後発局から出発したかの背景から、現在に至るまでの歴史をおさえながら、小川宏氏の人柄と話術と記憶力のよさを引き出し、西ケ谷プロデューサーの社会的事件に敏感に対応しつつ、テレビらしいナマ番組に徹しようとした情熱も披露され、十七年間続いた人気番組の魅力を裸にしていった。

補助席まで出た客席のホットな反応のよさに、最後小川氏は客席に土下座して別れを告げたのには驚いたが、客席は湧きに湧いていた。

「こんないい出来だと二回目からやりにくいなア」と、つい本音の感想を連発してしまうほどだった。

いい出来では、幕張の第六回インタービーシンポもひけをとらない優れものだった。パネリストも個性的、焦点の分野もフィクションとノンフィクションの間という、いま関心の高まっているゾーンである。

観客数十人では、勿体ないと感じるほどにプロが聞いても刺激的な味わい深い内容であった。

さて、来年早々、グランプリノミネートが、さらにテレビ五十年記念シンポの開催《二月八日（日）早大井深記念会館》も待ちうけている。パネリストは吉田直哉、加藤秀俊、重村一、吉田望の諸氏。司会は蟹瀬誠一といった顔ぶれである。

扱うテーマは「テレビは何を目ざし、何を創れなかったのか、そして今後は？」。文明論的視点を交えて論じてもらう構想で、更なる練りこみの必要を痛感し準備中である。

二月には渋谷からの東横線が延長され、放送センター近くに駅がオープンする。東京から便利になった横浜の情文ホールなどで三月には「名作の舞台裏No8」「放送人の研究～佐々木昭一郎」「私の選ぶベスト番組」などのイベントが控えている。

木元敎子氏に取材に行ったとき放送人の会の説明をしたら「すごい。いいことやってる会なのね」と言われて「いや、まったく本当にそうなんです。ただ会員のボランティアパワーだけが頼りで」と答えると「あら、いまはボランティアが世の中変えるのよ」と背中をドンと叩かれてしまった。

地域のテレビ番組を語ろう　全国フォーラムin横浜　第一回

このフォーラムは十一月十一、十二日の二日間、横浜情報文化センターで行われた。主催は横浜市、(財)放送番組センター、「放送人の会」。後援は民放連、NHK、ATP、(財)横浜産業公社。参加者は二日間延べ百八十三名。内訳は放送局百八十三名、放送人の会四十六名、横浜の視聴者約五十名など。

初の番組コンクールの参加作品は民放五十五番組、NHKは全国八ブロックの代表十一番組。予想を大きく上回る規模になった。実行委員会挙げての予備審査の結果十本が選ばれ、最終審査は川口幹夫放送人の会名誉会長、藤久ミネ、勝部領樹、澤田隆治、木村栄文、久野浩平の各氏および岡本孝夫横浜市長室報道担当部長、松村直央放送番組センター常務理事に委ねられた。

受賞作品は別項の受賞者の言葉のタイトルをご覧いただきたい。

大会プログラムは左記の通り。

第一日

《番組視聴と討論》

第一部・バラエティー系、第二部・情報系

司会　石井清司

第三部・討論「地域がテレビを変えていく」　司会　松尾羊一、パネリスト　石橋冠、今野勉、澤田隆治、藤久ミネ、村木良彦

第二日

《事例報告と討論》

第一部・北海道からの報告と提言　司会　中田美知子、パネリスト　林健嗣、原田徹、星川佳子、保科修也

第二部・九州からの報告と提言　司会　石井清司　パネリスト　岸本晃

第三部・討論「地域文化と放送・その展望」　司会　村上雅通、パネリスト　佐藤洋介、曽根英二、田中隆、中崎清栄

《番組コンクール表彰式》

（中田宏横浜市長挨拶と澤田隆治審査委員代表講評、川口幹夫名誉会長閉会挨拶、写真集は別項がある）

横浜市長賞

探険！九州「初めての島の旅」

RKB毎日放送　梶原稔生

今回、横浜市長賞を受賞させていただき、本当に恐縮しております。

「探険！九州」は1990年に放送を開始したゴールデンタイムの1時間の情報番組です。温泉、グルメから、ヒューマンドキュメントまで幅広く扱っています。強力なネット番組との視聴率競争、そして、ネタ決めから編集まで、追われる毎日です。

こうした中で、いわゆる「大作」でなく、「レギュラー番組」にスポットが当たることは、地域の番組制作者にとって本当に励みになるもので、感謝にたえません。

受賞作は、「初めての島の旅」。舞台は、高知県柏島の小学校。この島では、上級生になると橋の上から、勇気の証として飛び込まなければならないという暗黙のルールがありました。しかし、その中に一人だけ飛べない少年がいました。番組では、この少年が、最後に飛び込むまでの心の葛藤を「橋の上のドラマ」として追いました。

もう一つの柱は、周囲の人々との暖かい交流でした。お母さんが「いつか飛ぶよ」と、少年を信じ距離を保っているのが印象的でした。個性的で優しい校長や担任の先生たちにも出会えました。取材させて頂いた方々にこの場を借りてお礼を申し上げます。

テーマは「勇気」と「教育論」。少年の挑戦は、誰でもが子供の頃、経験したことではないでしょうか。（報道局社会情報部）

放送番組センター会長賞

北海道スペシャル・ドキュメンタリー顔「ヤミ金と闘う男」

NHK札幌放送局　保科修也

この度は栄誉ある賞を頂戴し、誠にありがとうございました。

札幌放送局では先日、地域情報番組「ほくほくテレビ」（月～金、15・07～19・00）で、担当ディレクターや番組出演者も登場して、受賞の報告を兼ねた再放送を致しました。

受賞作は、「北海道スペシャル」（毎週金曜20・00～20・43）で今年度月1回放送している「ドキュメンタリー顔」シリーズの第1作で、ヤミ金被害者を救うために奮闘する司法書士・札幌の里村喜美夫氏の姿を描いた番組です。「ドキュメンタリー顔」は、道内でひたむきに生きる人々の姿を、その表情を見つめる中で描き上げようというシリーズで、若手育成の目的も兼ねています。受

賞作を担当したのも、入局五年目のディレクターでした。

北海道でもヤミ金問題が広がる中、担当者は、決して広くはない事務所の中だけで里村氏を見つめ、被害者に対する優しさと厳しさ、ヤミ金業者への毅然とした対応ぶりなどを五日間に渡って克明に撮り続けました。放送後は数多くの反響が寄せられ、手応えのある番組となりました。

今回の受賞は、里村氏の取り組みに対する力強い支援として、また、ともすれば全国区の問題として東京制作の番組に委ねてしまいがちな内容を、お隣の出来事として取材した地域放送局へのご褒美と心得、今後の地域番組充実への励みとさせて頂きます。ありがとうございました。（放送センター　番組制作）

放送人の会名誉会長賞

VOICE「私大前納金はぼったくり」

毎日放送　澤田隆三

MBSの夕方ニュース『VOICE』のデスクになったのは二年前の夏。ドキュメンタリー専任という恵まれた職場で六年も過ごした私にとって、ニュース番組の変わりようは驚きでした。ニュースの現場において「競争」といえば、以前は特ダネ競争であり、いち早く現場から「ナマ映像」を出すかといった、少なくともニュースの内容に関わるものでした。しかし、今や「競争」の第一は視聴率の追及であり、視聴率を最優先してネタを選択するのが、テレビニュース人の思考となりつつあります。

視聴率より優先する別の評価軸を持っていたニュースでさえ、こうした有様なのですが、こうした中、今回、日々のニュース活動に対して「放送人の会」から賞を戴いたのは、きわめて有意義なことだと思っています。受賞後、職場で「受賞理由」などを部員に話すと、皆、一様に喜んでくれ、「視聴者の声をいかに大切にし、ニュースに反映させるか」というわれわれの基本的なコンセプトが評価されたと、自信を深めたようです。

ややもすると、放送翌日の数字のグラフに一喜一憂することで「総括」が終わっていたニュースの職場を活気づけてくれるのは、特ダネを含む「オリジナリティー」に対する第三者の評価であることを再認識させていただいたのが、今回の受賞だったと思っています。（報道局ニュースセンター）

優秀賞

北海道遺産物語

北海道テレビ放送　四宮康雅

「北海道遺産」とは北海道の豊かな自然、北の大地にいきてきた人人の歴史や文化、生活産業などの中から次代へ地域の宝物として活かしていきたいと道民参加によって選ばれた有形・無形の宝物のことだ。二年前の十月末に第一次指定として摩周湖など二十五ヶ所が選定された。これをデジタルハイビジョンで撮影し、映像資産として活用するとともに、多角的な視点でマザーランドの素顔を伝えたいとスタートした企画だ。幸いにも企画の趣旨に共鳴して頂いた地元企業の特別協賛を得て、週一回5分ベルトとしてはローカルでは稀な良質の番組に育った。

厚みのある映像を支える格調高く、詩的なテキスト。テキストのスタイルを決めるまでに三カ月もの時間をかけて味わいを生み出した。ナレーターは男性的でありながら包容力と温かみに満ちた竹中直人さん。音楽はスケールの大きな楽曲世界で知られる中村幸代さんにお願いした。

番組としては説明するのでなく、感じてもらい、地域の未来を考える共感の輪の中に小さくでも一歩を踏み出してもらうことを番組としては目指したいと思っている。今年六月には第二次選定候補の募集も始まった。地域遺産を地域資産として活用することを目指した北海道の旅は、まだ始まったばかりだ。（コンテンツ本部編成・企画センター・企画グループ部長）

優秀賞

ユーガッタ！CBC「大石で行こう」

中部日本放送　大石　邦彦

「お前は誰からも愛されるあの寅さんの様になれ！」このコーナーを立ち上げる際、あるスタッフが僕にこう言いました。そして、その時から僕のフーテン生活がスタートしたのです。あれから五年、1000回を間近に控えた今年、このような素晴らしい賞を頂き、スタッフ一同、心から喜んでおります。このコーナーのコンセプトは、寅さんのごとく僕が東海地方のあらゆる市町村へ赴き、硬派から軟派まで様々なネタを通して、その地元の人達とふれあうというものです。それゆえ、われわれの生命線でもある『日々

のふれあい』を評価して頂いた事は、このコーナーの大きな自信につながりました。

では、その『日々のふれあい』はどこから生まれるのか？ディレクターがデジカメを持ち、リポーターである僕とたった二人の取材ゆえ、相手も緊張せず、相手との距離も近くなる。もちろん、それもあるかもしれません。でも、それ以上にディレクターと共に、短時間で相手との信頼関係を密にして、心と心の距離を縮める事を心掛けているからかもしれません。これからもこの賞を頂いた事を励みに、ハートのある人情味あふれるリポートをしていきたいと思います。（アナウンス部）

優秀賞

ニュースアイ・シリーズ「海の風景」

テレビ愛知　桐山洋介

愛知県はデジタル放送が始まり、地方局は厳しい環境におかれています。こうした中で諸先輩から過分なご評価を戴き、今後これまで以上に地域が抱えている様々な問題に目を向けていこうとの思いを新たにしました。これからも地方局の存在意義を示せるような地域に密着した番組や取材を続けていけるよう、がんばっていきたいと思います。（報道制作局報道グループ・ディレクター）

優秀賞

もぎたてテレビ７０

南海放送　宇都宮　宏明

この度は、地域放送局にとって大変励みになる賞を頂きまして誠にありがとうございます。

「もぎたてテレビ」は今年で十三年目を迎えていますが、ずっと同じリポーターが、ずっと同じ「愛媛のいいとこ探し」というコンセプトで旅を続けています。今回評価して頂き、このことが地域の方々に親しみを持って受け入れられている最大の理由だということを改めて感じました。特に「地域とたしなみのある密着感」があるというご講評が印象的でした。

また、今回のフォーラムに参加させていただいて、各地域制作者の視点や問題意識の豊かさ鋭さ、そしてバランス感覚に、“ビリビリビリビリ”刺激を受けました。特にＣＢＣ（中部日本放送）制作の「大石で行こう！」は、リポーターの大石アナの出過ぎず、臆さず、温かく…、というキャラクターを制作者が存分に引き出していて、「放送の原点は“人の力”だ！」と強く感じました。

今後も今回の経験と刺激を存分に生かして、懐かしくも新しい「ど・ローカル」番組制作を目指します。

優秀賞

四国羅針盤「よもだのこころ～天野祐吉のメッセージ～」

ＮＨＫ松山放送局　原　一雄

番組のタイトルにもある〝よもだ〟。伊予弁で「いいかげんな・おっちょこちょい」或いは「肩の力が抜けている・ユーモアがある」という幅広い意味を持った深みのある方言です。松山地方の俳人正岡子規は病床においても、〝何物にもとらわれないユーモア〟の精神で近代日本語の改革に努めた、まさに〝よもだ〟な人物であったと、子規記念博物館長・天野祐吉さんは評されています。しかし今では松山でも、その意味を知る若者は少ないそうです。ましてや私は関西出身です。解るようで解らない、微妙なニュアンスを持った言葉、それが〝よもだ〟でした。

どうすれば〝よもだ〟を理解出来るのか、それは〝よもだの精神〟をこころから愛する天野祐吉さんに伺うのが一番でしょう。私は今回二時間以上に及ぶロングインタビューを行いました。お話は青春時代の思い出から時事問題に至るまで、大変興味深い内容でした。ところが話が進むにつれて、質問するアナウンサーの横で、真剣に耳を傾ける私は何とも言えない不安に包まれていきました。何かが足りない、でも何が足りないのかが解らない。瞬く間にインタビューは終了してしまいました。

局に帰り、話の内容を一つ一つ聞き返し、私は愕然としました。聞きたいと思っていた事が、ほとんど聞けていなかったのです。天野さんはユーモアたっぷりの語り口で相手を楽しませながらも、聞きたい核心部分は決して語りません。天野さんは、こちらの狙いを全て理解した上で相手を煙に巻きながら、会話の駆け引きを楽しんでいただけだったのです。天野さんは最後にこう言いました。「こんなインタビューに真面目に答えているようじゃ、僕もまだまだ〝よもだ〟じゃない」。〝よもだ〟の言葉の意味を身をもって痛感した瞬間でした。

（報道番組）

審査委員会代表

澤田隆治氏・講評

審査の全体像を一言で説明するのは大変難しいので、感じたことを申し上げたいと思います。

地方の映像には二つあって、NHKと民放とこんなに作品の感じが違うのかというのが私の正直な感想です。NHKの作品は全国で放送されることを多分に意識して作ってあります。作り方の姿勢が全然違う。実際NHKの場合は評価を得た作品は全国で放送されるチャンスがあります。両方を見ると違いがあって、ローカル向けのものと、全国向けに多くのひとに見てもらって共感を得るための作り方があり、それぞれの担当者はいろいろ考えているようです。

特に賞に輝いた「ヤミ金と闘う男」（札幌局）の番組は見ていてどきどきするような番組でしたが、一つの部屋の中だけに限って、被害者の顔は出せないわけで、司法書士の顔だけで、声と顔でヤミ金の恐ろしさを追求していました。この手法は非常にユニークだし、担当者の意図が伝わってきました。

「四国羅針盤～よもだのこころ～」（NHK松山放送局）は、正岡子規の博物館のお客さんがどんどん減っているので、それを何とかしたい、天野祐吉さんに頼んでイベントをするという、どちらかと言えば地方の自治体のPR番組ですが、非常に手堅い手法で見やすく作られ、あわよくば全国に出したいという意図が明らかに分かります。

一方民放の番組は今回のコンクールに応募したという意味があったのかもしれません。地方でも有名な手練れの人の作品より日常の作品が多く応募されたという感じがあり、どちらかと言えば地方を向いて作っている態度がありありと見えてきました。昨日今日のシンポジウムでは「物足りない。ジャーナリスティックなセンスがない」という厳しい意見も出ましたが、日常性とリアリティーの相克もあったようです。多分に地方を向いて作っている。やさしさ、日常の中で作って行く。そんな中で3本のリポーターの作品が印象に残りました。

例えば名古屋の大石君、「大石君が行く」（中部日本放送）とタイトルになっていて、インタビューの仕方は人間性がそのまま出ていて好感がもてました。水害地の取材で難しいところへもどんどん入って行くので、相手も心を開く。長いことやっているから顔なじみということはあるかもしれないが、それこそ地方に密着した番組の作り方だと思います。何もスターを使わなくていいのです。こういうやり方では福井の越前屋俵太さんを使った作り方が一つのパターンになっていて、あちこちの民放に中央からタレントを呼んで作る番組がありますが、俵太君以外の番組はほとんど成功していません。むしろ地元のアナウンサー、地元の人を使って方言丸出しでやったほうが非常に人間性が出る。そんな意味では大石君はピカ一だと思います。それから市長賞に輝いたRKB「はじめての島の旅」の高田課長、偉い人かと思ったら「高田課長」というタレント名だそうですが、あの高田さんのやさしさ、行動力、子供へのはげましなど、非常に人間性が出ていました。

南海放送「もぎたてテレビ70」の永江孝子アナ、この人は全然肩に力を入れず、低い目線で地元のおばあちゃんと一緒に喋って、子供たちとも一緒に喋って行く。このやさしさがいい。この3人の素晴らしいパーソナリティーをこのコンクール発見できたことはわれわれには非常に嬉しい。

かつて私が「ズームイン朝！」をやっていた時、地方のキャスターが番組のおかげで有名になり、中には東京へ出て来て議員さんになった人もいました。最近はそんなことがなくて、地方はどうなっているのかなと思っていたら、こういう形ですっかり地域に密着しています。中央に出て来てというより、地元でしっかり楽しい番組を作ってくださることを私は望みます。その場合はその番組がこういう形でも東京で見られる、全国でも見られるというチャンスが是非ほしい。そうなればこのコンクールの意味があったのだと思います。今年だけでなく、来年からもこの形が続けられれば非常にいいと思います。希望が一つあります。「地方のリポーター賞」という形で個人を表彰したい。それが早道です。

番組の作り方では地方だけを向いているために、放送だけしてしまえばいいという感じの作り方がありありと見えます。コンテストですから、われわれのように沢山の番組を作ったり見たりした審査員がいっぱいいる時は作り手の気持ちの裏まで全部読んでしまうのです。昨日はかなり厳しい批評が出ました。作り手の気持ちはオンエアーでは分かりませんが、コンクールになると違うものです。これは本当にぶっつけ本番なのか、これは何日間行って撮影したのか、など作る上でのいろんなプロセスが分かってしまう。作為をしないとドラマティックにならないということはあります。確かにドラマティックに見せる必要はありますが、そこらのぎりぎりの兼ね合いが地方で放送する時は許されても、一堂に会して中央の審査に来ると番組はその特異性でなく、むしろ相対化されてしまうものです。私も作り手の一人ですが、こうしたことを今回のコンクールの教訓の一つとどこかで心にとめて頂ければと思います。

全体でこんな雑駁な講評で申訳ありません。

中田宏横浜市長挨拶

只今ご紹介頂きました中田宏でございます。今日は地域番組コンクールで、今横浜市長賞を皆様とともに表彰させていただき、合計８つの作品が受賞されたわけで、心からお祝い申し上げます。コンクールにつきましては全国各地のテレビ局から大変多くのご応募があったと聞き及んでおりますし、その真摯な番組制作とその結果としての映像はどれも地域の中で多くの人に親しまれたものばかりだと思います。そういう意味では、選考に当たっては大変な審査のご苦労が目に浮かぶわけです。それでもこうしていくつかの作品に賞を出す以上絞らざるを得ないわけで、そんな中で受賞された皆さんには本当に敬意を表しますし、また、これから先こうしたことが一つの契機となって一層地域の中でいい番組が供給されることを願ってやみません。

今回皆さんとご一緒させて頂いて、横浜市がこのような形で参加させて頂く、主催をさせて頂くことになりましたのには、私達の多少の思い入れがございます。

一つには横浜市が文化、映像都市としてこれから先その地域性を発揮して行こう考えている、その方向性にこの企画が合致して、私達としてもこうした盛り上げを図って参りたいという思いがあったからでございます。

例えば横浜市ではフランス映画祭を１０年来やって参りましたけれども、フランスの映画を見るということについて、当初はやり始めてみたもののあまり多くの方のご関心はあったわけではありません。しかし毎年回を重ねるごとにフランスの映画を横浜で一番最初に見るという多くのファンが出来、今はチケットを求める人が行列を作って、毎年フランス映画を見ることを心待ちにしている状態です。そうしたフィルム、そしてここの情報文化センターもそうですが、是非映像というものを大切にして文化として発展させて行く、ということに向けて横浜として取り組んで参りたいと思っていますので、今後とも皆さんとこの会を盛り上げて行きたいと心しているところであります。

そうしてもう一つの思い、これは私の思いと受け取って頂ければと思いますが、やはり社会をよりよく情報として知り、そして口幅ったい言い方ですが、社会の文化水準を上げて行くためには多くの良い番組が供給されることが実に重要なことだと思います。この文化水準ということについて今ここで長々と定義をしたり、そのことについて分析することは避けますが、最近のテレビ番組を見たりするとどうもこれでいいのかなあと思うケースも率直に申し上げれば、視聴者としてよく感じます。

先般もそうした中であってはならないテレビ界の不祥事があったようです。多くの視聴者番組に対して目を見開いて、質のいい番組を視聴者自身が求めて行く、そうしたことのためには是非テレビ界の皆さんがご自身の自発性と気概をもっていい番組を作って頂きたいと視聴者の一人として思います。そのためにはこうした場があって、作り手の気概と創造性がどこかで賞されるような場を大切に育てて行く必要があると思います。

今日一部の新聞に横浜市長がとして、いわゆる有害図書についての規制を検討すると大きく報じられています。実は明日の８都県市のサミットで私が議案として出すものを先行して一部の新聞が書いたものです。ちょっと見るに耐えないようなワイセツ系の雑誌が小学生も出入りするコンビニで堂々と売られていることについて、出版の自由を侵すものではなくて、どうぞ表現の自由は追求して頂いて結構ですし、そうしたものが出版されることも私は公権力として抑制しようとか規制しようとか思っていません。ただそれが誰もが目に触れるところで販売されることが望ましいのかとなると、社会として、業界の中で一定のルールを自らわきまえて行動出来ないのなら、どこかで考え直す必要があります。そんな問題提起を明日するつもりで今日の新聞報道に出たわけです。

テレビの世界にそれを当てはめるのは失礼かもせれませんし、そんなことをここで申し上げるつもりはありません。例えば学校教育を考えてみてもそうですが、これは悪い、あんなんじゃダメだ、とは多くの人が言えるのですが、それだけで終わらせては意味がない。ああいうのはいいね、こういう番組は素晴らしい、ということに囲まれた環境を私達自らが整備して行けるように、是非心あるテレビ界の皆さんと大いに力を合わせて、この会の発展をお互いに期して行きたいと思っています。

来年はもっともっと盛り上げて行こうではありませんか。横浜市民にとっても１年に一度、全国のテレビ番組というものを楽しむ、横浜市民に限らず全国からそういう方が集まって来れるようなそんな催しに将来は盛り上げて行きたいと思い、この第一回がそんな意味で大きな意味を持っていると思います。受賞された皆さんにはあらためてお祝いを申し上げ、そして今回の会の見事なご成功に関係者の皆さんに心から敬意を表して御挨拶にかえます。まことにおめでとうございました。

鵠沼海岸から⑩特別版

「地域フォーラム」の挨拶

名誉会長　川口幹夫

表彰式っていいものですね。作った人の顔がきらきら輝いて、いかにも前のほうを向いて進んでいる印象が強くします。今日は皆さんおめでとう。まだまだいいものをうんと作ってください。

私は実は今から五三年前だけど昭和二五年にNHKに入りました。その頃は勿論新人でして、福岡放送局にいて、約三年番組作りをやっていました。残念ながら私の頃はまだテレビがなかった。ラジオしかない時代です。音の世界ですからうんと深く探りこんで入らないとなかなか耳に訴えてこない。いつかテレビをやってみたいなあと思っていました。

それから三年後いよいよテレビがスタートして私は東京に帰ったのですが、何をやらされたかというと歌謡曲の番組です。いやだったですね。次はクラシックの番組、次はシャンソンの番組、次はバラエティーです。私はオンチなんですよ。歌を歌うと全部外れるから絶対歌いませんが、それがどういうわけか音楽番組をやれということになって、いやでいやでたまらなくて逃げ回っていましたら安藤さんといって音楽の大先輩が「もっとしっかりやれ。何やってんだ」「ぼく音楽ダメなんです」「ダメだからやめると言うのか？ダメだから一所懸命やります、と言え」「あの、何年くらいでしょうか？2年くらいでドラマに行かせてください」「バカ。二年や三年で音楽が極められるか？五年はやれ。そしたら許してやる」「ああそうですか」。

それからちょっと一所懸命になって、これはやらなきゃいけないなと思った。やっていてこれはちょっと面白いなと思ったのは、ラジオの世界は完全に音ですから、音が内容的にも技巧的にも優れてなければ全く受付けられない。ハートに迫らない。ところがテレビの番組は人間がそのまま画面に訴えてくるんです。表情であり、その人の思いであり、その人の気迫であり、そういったものが画面を通じて迫ってくるところに物凄い違いがあって、僕はちょっと感動しました。「これだ。テレビは音楽の番組でも音楽じゃないんだ。人間の番組なんだ。つまり、そこで歌っている人間がどんな思いで、どんな顔をして音楽をやっているか、それがテレビの音楽だ」と考えまして、明くる年は安藤さんのところへ行きまして「しばらくやります。五・六年やってものにならなかったらクビにしてください」と言って、それから始めたのが紅白歌合戦のテレビ版です。

ラジオは二六年に始まっていますが、テレビは僕が行った時から始まった。そしてやっているうち私自身がテレビの持っている魅力にひきつけられて、「そうだ。このメディアは凄いぞ。音だけで迫ってくるものにプラスして顔が迫ってくる。人間の気迫が迫ってくる。こういうものを作って行けばいくらでも面白いものが出来る。これは世の中の人たちに非常にアッピールする番組、訴えかけることが出来る番組だ。そういう映像だ」と思って、それからひたすら「人間と音楽」ということばかり追いかけました。

ですから私が若い頃やっていた番組は例えば「黄金の椅子」という番組は椅子に座る人は音楽人です。その音楽人がどのようにして自分の音楽を創造したか、どうやって音楽の表現を完成したか、そんなことをやっているうちにだんだん面白くなって、「歌は生きている」とかいろんなものを作りました。したがって私がドラマに行ったのは四三年です。十二年間音楽をやって、テレビのドラマはとうとう自分で作らないで、ドラマ部長になっちゃった。

今も、先ほどから番組を拝見して、ローカルで、地域で作っている番組は実に迫力がある。それはハートがあるからだと思う。地域の人の顔が見える。顔が見えるということはハートが伝わってくるということだ。そう思うので、かつて僕が思ったように地域の番組を一所懸命作って、テレビで多くの人に訴えかけて頂きたいと思います。そうすることが今のテレビを最もうまく生かす道になると思います。

昨日僕は東京で「少年の主張」全国大会をやりました。これは「少年の主張」だから中学生がメインで、それをNHKの「青年の主張」のようにやるんです。青年になると山っ気が出てきて、いろいろテクニックを使って苦労したり、面白い話を巧みに入れてどーんといった、工夫をするのだけど、少年の主張は「ぱーん！」と来るんです。それが何とも言えず快くて、僕は思わずほろっとしました。優勝したのは山形県の中学生が作った「広島を見て」という主張です。彼が広島へ行って、あそこで戦死した人たちのことを思って、それだけをただただ主張した。彼がどうやって広島を自分にイメージとしてぴたりと刻み付けたか、多くの人達のことを思ったか、これからの社会に訴えるか、それが実によく分かってほとんど満点で最優秀賞になりました。そういう若い世代が今育っています。僕はこの世の中まだまだいろんなことが出来ると思っています。それをやる若い層がテレビやラジオで育てられて大きくなっています。この大会がますますいいものになって、映像を通じてテレビが国民の一人一人に或ることを訴え、或ることを楽しませ、知れしめ、いろんなことをやって、心の中に送り込んでくれることを期待します。

（記録　伊藤雅浩）

フォーラム　初日　H15.11.11

情文ホールがある放送ライブラリー

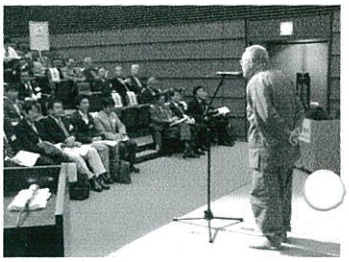
受付風景

会場案内板

開会式

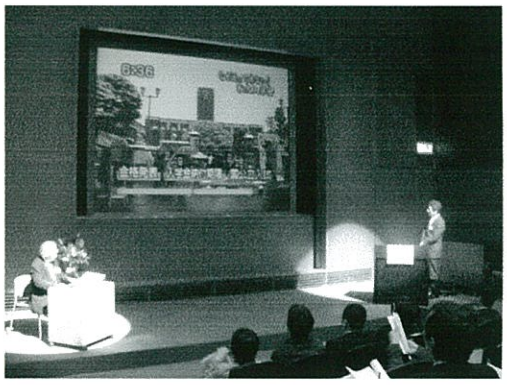
フォーラム会場

総合司会　寒河江正（会員）



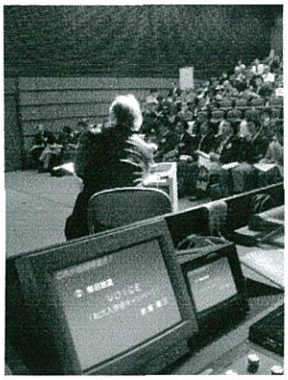
基調報告　松尾羊一（会員）

これが地域の番組だ



番組紹介の報告者

番組視聴および討論



客席（各地域局現場の人々）

地域のテレビ番組を語ろう

（放送人の会のメンバーによる）

討論風景

懇親会

久野浩平（会員）村木良彦（会員）

2日目

H15.11.12

撮影と構成・磯村健二

北海道からの報告と提言

熊本からの報告と提言

岸本晃（プリズム代表）

石井清司（会員）

地域と放送　その展望

ファイナル討論（コーディネーター　村上雅通）

講評　番組審査委員長（澤田隆治）

それぞれのトロフィー

表彰式～閉会

中田横浜市長　川口名誉会長 松村放文センター常務理事

中田横浜市長挨拶

横浜市長賞の授与

地域番組コンクール入賞局の皆さん

連載　放送人の証言

久野浩平

テレビ開局当時の現場

テレビ放送が1953年2月1日開局（NHKテレビ）した前年52年4月入局の**合川明**さんは砧のNHK技研で開局準備中のテレビ研究班に配属…

「田村町からボンネットバスを仕立て毎日毎日、砧スタジオ（俗に砧村）へ行き、ドラマ、演芸、浪曲などを映してトレーニングをしていました」

この合川さんの「証言」が中心になるのは開局後のことです。『事件記者』からはじまり、初期のNHKテレビドラマをリードした畑中庸生、永山弘、梅本重信3氏の作風や方法論の思い出、大河ドラマ立ち上げに際しての五社協定への挑戦など興味津々の話が続きます。

その頃の技研砧スタジオについては**橋本潔**さんの「証言」があります。

当時二十三歳の舞台照明家橋本さんは畑中さんから技研に招かれました。

「NHKには音の技術者、表現者がゴマンといましたが、絵を作る技術者は一人もいません。もしよかったらラジオを絵にしてくれませんかと、畑中さんに請われた言葉が僕にはひどく印象に残っています」

橋本さんは当時の照明機材やカメラの性能について、スタジオの様子を絵に描いて説明するのです。

「カメラが2台あって、その後ろに号令台というのがあった。階段付きの台の上からキューを振るわけで」

橋本さんはこの後、日本初のアニメーション映画『白蛇伝』の製作、NET（現テレビ朝日）開局に参加して「氷点」など幾多の美術設計に関わります。（**注**　橋本潔著「自分史　テレビ美術」レオ企画　に詳しい）

福岡のNHKにいた**川口幹夫**さんがテレビ要員として異動、上京したのが53年4月でした。

「君は使いべりしない体をしている。若くて体が強くなきゃいけない、それが条件だなんておだてられてノコノコ現場に飛び込んだわけ」

「黄金の椅子」「紅白歌合戦」などプロデューサー時代から始まる川口さんの「証言」は様々な分野に広がります。る

「夢であいましょう」などバラエティー番組の思い出、ドラマ部長当時の『勝海舟』事件の真相、のちにNHK会長として試みた改革プロジェクト。さらに放送の理念を語り、放送文化への愛情が溢れる率直な「証言」と続きますが、58年NHKの8月に続いてNTVが開局します。開局の民放の映像を見た川口さんの「証言」では「何よりびっくりしたのはね、時間が正確なこと。NHKの番組は全く不正確で、ヨーイドンで正12時に始まるのに準備ができてない。まだ無理だと連絡すると《暫くお待ちください》とパターンが出るんだ。《暫く…》がでるだろうとお手並み拝見。ところが時間通りピタリ。しかもコマーシャルがパッパッとでる。それを見た我々はひっくりかえって驚いたわけでね」

そのNTVの開局期のプロデューサーで活躍した**津田昭**さんの「証言」

「いやいやとんでもない。僕は7分押したことがあるからね。でも割とへっちゃらだった。あの頃は」

そんなことよりと、津田さんは「オンエアの4，5日前にスタジオでみんながおかしいと言う。照明さんがいない！ライトだけがスタジオの転がっている！そんなの雇っていない？じゃ誰かやれって。ま、そんな次代だったんですよ」

津田さんはNTV初期の音楽番組から『テレビ千一夜』『日産スター劇場』『地方記者』へ。NTVドラマの歴史を語ります。

KRTV（現TBS）開局は55年4月1日。新生新派の文芸部からKRラジオの企画責任者になっていた**田中亮吉**さん。

「一億総白痴化と言われた時代ですからテレビは嫌だなあと思いながらも、ま、やる以上はやってみようと、

2004放送人グランプリ

今年も「放送人グランプリ」のシーズンが到来しました。

前回は「北の国から」の杉田成道氏とそのスタッフがグランプリ、村上雅通さん、岡崎栄さん、石高健次さんが特別賞でした。

今年の第三回も要領は昨年と同じです。候補者は会の内外を問わずこの一年、放送（ラジオ・テレビ）で、最もすぐれた仕事をしたと思われるひと。

ノミネートできるのは放送人の会員に限ります。

原則として、グランプリは一名、その他の賞（特別賞、奨励賞など自由にネーミングしてください）は二名までです。推薦の受付期間はこれから決まりますが、事務局へFAX、郵送、メールなどでお願いすることになります。

東郷（静男）さんと僕はテレビ局創設の方へ移ったんですよ」

「証言」はＴＢＳの代表的番組『東芝日曜劇場』の発足当時、後に移籍先のＮＥＴでの『特別捜査機動隊』『判決』などのプロデュース活動の思い出を…残念なことに田中さんはこの「証言」収録直後今年の7月に亡くなりました。（注 山本隆則さんらで「追憶 田中亮吉の世界 ある六本木物語」を出版）

テレビ開局時代はほかに、５３年ＢＫのテレビ開局と同時に入局した**和田勉**さん、５５年ＯＴＶ開局に参加した吉村繁雄さんの「証言」もありますが、紙数が尽きました。

最後に、川口幹夫さんは言っています。

「この世の中、あまりにいろんな点で制約が多くなり過ぎた。なり過ぎてみんな結末がわかっちゃう（中略）僕はもういっぺん、制約なしで何でもやってみようということを、民放ＮＨＫも言うべきだと思いますね。そうしたら面白いですよ。もうちょっと」

＜付＞

昨年１１月の会報に既収録「証言」の全リスト４１人を掲載しました。その後収録者は２０人。

田英夫、佐藤年、国枝忠雄、田中亮吉、高橋啓、池田義一、合川明、宇野昭、斎藤守慶、大友虎勝、武谷雅博、吉本琢也、石川純昌、岩井禧周、深町幸男、吉田直哉、津川溶々、岸田功、遠藤利男、沖野暎の諸氏で、都合六十一人の貴重な「証言」を蓄積しました。

今年度は **高橋信三記念文化振興基金** の援助を頂き当初の目標百人！を目指し深く広く、多様な「証言」を収めていこうと目下構想中であります。

「放送人の証言」

実施ガイドライン

２００３年１１月

1、（趣旨）これまで番組と放送の創造や革新に関わってきた現場の制作者・技術者・関係者たちに、当時の動向や番組／放送実現までの経緯などを具体的かつありのままに語ってもらい、それをオーラル・ヒストリーとして録画し、保存する。

2、（実施の目的）

（1）放送文化の向上に寄与した放送人の顕彰

（2）文化創造者である放送人の人間像の明確化」、基本資料化

（3）次世代放送人の研修・学習・ノウハウ継承のための素材整備

（4）オーラル・ヒストリーとして各種ソフトに活用し、新時代の放送創造と革新に資する

3、（オリジナル収録制作ガイドライン）

（1）「証言」は、証言者の証言内容を忠実にいきいきと伝えることを目的とし、原則として１カメラ収録を行う。証言をスムーズにするため、あらかじめ準備した聞き手が、質問や内容ガイド／フォローなどを行う。証言内容をわかりやすくし、証言者のアクションや表情、その場の雰囲気を伝える意味で、カメラワークは必要最小限にとどめる。

（2）証言者が希望した場合とロールチェンジ以外は、録画を中断せず、第一次資料としてすべてを記録する。（収録後のオフレコないしはカット希望については、４にしたがう）

（3）証言内容に、事実誤認と思われるもの、他の証言と食い違うものまたは公表された歴史的事実と異なる部分があっても、ただちにカットは行わない（聞き手が確認することはあるが、議論が目的ではない）。証言者がそう記憶している場合、事実関係は後日の研究にまかせることとする。

（4）オリジナル・テープの保管・保存方法は、放送人の会が別途定める。

4、（視聴用テープ制作ガイドライン）

（1）必要な場合、最低限の編集およびあるが、証言中に他の映像を挿入するなど、番組制作や演出に当たる作業は極力避ける。（別の使びテロップ挿入を行うことが用目的で編集・制作を行う場合をのぞく）

（2）必要な場合は証言者と相談の上、視聴用制作の際に一部編集／カットを行うが、それ以外に編集やカットはしない。

① 証言者がオフレコやカットを希望した箇所

② あきらかに他人を意図的に誹謗中傷することになる内容

5、（著作権）オリジナルテープの著作権は放送人の会に所属する旨の承諾書を、収録時に証言者からもらうこととする。放送人の会の活動以外の目的で使用する場合（メディアでの部分使用、出版等）は、当事者があらためて証言者側としかるべき著作権処理をおこなう。

6、（その他）

南船北馬

思い出のシーン・言葉

田澤　正稔

この十月末、定年。退社式のあいさつとか「社報」のオツカレサマ欄向けに、さて何でゆくかとアタマを捻った。結局、変哲もない謝辞が一番スッキリする、ということになったのだが、どうしても長くなるのでボツにした「思い出のシーン・思い出の言葉」から一二拾ってみたい。

昭和四十一年。はじめて配属された編成局第二演出部。毎週月曜、部会がもたれる会議室の壁に掛かっていた色紙にはこう書かれていた。

「番組制作とは社会正義を制作することである／社長・今道潤三」

それを背にした鈴木道明部長の口癖は「きみたちはアウトローと思われている。ネクタイをしてこい。十曜はハーフデイだからその限りにあらず。」

「七人の刑事」のAD時代、綺羅星の如き七人のDに仕えた。

山田和也さん。須子信人さん。柴田驚さん。鴨下信一さん。今野勉さん。堀川とんこうさん。日向宏之さん。よく飲み、よくついてまわった。

「ヒット番組には前身があってね。“七刑”の場合は“刑事物語”という30分番組」―今野さんは酔うと「この奥津城は誰のものぞ…」―両番組のPだった蟻川茂男さん作詞（作曲山下毅雄）の主題歌を口ずさんだものだった。

前身といえば、「金妻」のプロトタイプとなった3時間ドラマ「女ともだち―誰のものでもない私の人生」のタイトルにダメを出され、ぼく自身揺れたとき、「このタイトルが気に入ってやるんだからな」と演出の鴨下さんに一喝され、ドラマの骨格が定まったのだった。その鴨下さんには

「向田さんのことはなんでも思い出になる」　の名言がある。

「隣の女―現代西鶴物語」のロケハンで彼女とNYにご一緒した。ある朝、二日酔いのぼくと浅生憲章君の起き抜けの顔をキッと睨んで

「赤鰯の目」　と一言。

その番組が作家向田邦子の遺作になろうとは。　合掌。

地域フォーラムin横浜

田原　茂行

今年十月、久しぶりに入った「放送人の会」事務局の一つしかない窓の前の棚はビデオテープで一杯だった。

実行委員の方々の好意ある計らいで、委員会の作業のお役に立てなかった私が、コンクール予備審査の日に、この情景を見ることができた。足先が熱くなる感じがした。

昨年の「ローカルの知恵は無尽蔵！」が終わってから切れ目なく「in横浜」の準備が進んだような気がしていた。しかし実は多くの幹事の方々の提言によって主催者が増え、全国の人的ネットの拡大で実質が変わった。

業界の環境の変化が進み、地域番組の制作条件が一層厳しく変化したはずのこの一年、地域免許の意味と地域番組制作者の言葉の重みは増したような気がする。その分、東京の地上と赤道から来る番組はますます軽くなったようだ。

フォーラムの一日目、最前列の各局の制作者たちがお互いの番組の切り口について交わした言葉は、もっと時間のほしい内容が溢れていた。直後のシンポの村木パネリストも冒頭「続けて聞きたかった」と言ったが、私の隣にいた市民参加者は「もっときたかったのに」と捨て台詞を残して帰った。

二日目の北陸放送の中崎清栄さんの発言はずしりときた。短い企画を次第に民放祭参加作品に育て上げるまでの工夫と戦略は、今の番組づくりと中央の評価の仕組みを率直に描き出した。

札幌テレビの林健嗣さんは「グルメで人間を描く」「地域経済を応援するが、公害や原発行政とは対決する」など、体験を支えてきた覚悟を惜しみなく聞かせてくれた。「若い制作者は作品性に興味を示さなくなった。生ワイドは、ニュースを見せることを目標につくっている」という言葉は、今後のワイドショーの役割論、番組と制作者の評価の仕方への基本的な問題提起だと感じた。

最後にこの場を借り、フォーラムをここまで仕上げていただいた幹事の皆様に改めて感謝とお詫びを申し上げさせていただきたい。

フォーラムに参加して

植田　功一

仕事の都合で初日のみの参加でしたが、ローカル番組を当事者が説明する構成はその人ならではのコメントが聞けて有意義でした。できれば番組の本数をしぼって中身を十分見せて欲しい。じっくり見てみたい。

司会進行がもう少しスムーズになれば中身がより濃くなる、時間が有効に使える、と感じました。

二日目のパネルディスカッションに参加できなくて本当に残念です。来年も基本的に同じコンセプトでの開催を希望します。

（元NHKアナウンサー、現フリー㈱ジョイスタッフ所属）

テレビ50年 私の証言

Funy funy what money can do

佐々木昭一郎

私はラジオ出身だ。6年間ラジオ文芸部にいた。最初の一年はクイズ班で『話の泉』などの助手。『泉』は現代のあらゆるクイズ番組の礎だ。司会は高橋圭三さん。P・Dは名物男・判治謙次郎（ハンジ・ケンジロウ）。徒弟制度のない放送局では新人は先輩から盗むのだ。判治さんは私の師匠第一号だ。6ミリ編集を完璧に学んだ。黄デルにハサミを入れ中指で接着するやり方だ。判治氏は65年浜松の放送部長に転じ、彗星発見者池谷薫少年に私を出会わせた。イタリア賞『コメット・イケヤ』は判治謙次郎のおかげだ。

2年目はバラエティー番組班。3年目にドラマ班。以後たった4年だが、ラジオドラマを作ることになる。

当時のラジオには巨匠と呼ばれる演出が何人もいて単発ものは殆ど巨匠たちの演出。巨匠作家が巨匠演出から台本を依頼され作家は、本読みまでやっていた。一人だけこうした巨匠とは正反対の仕事をする男がいた。

遠藤利男。彼が率いる「放送詩集」は画期的だった。大岡信、福田善之など後に名を成す作家たちを次々に起用した。徹底的に言葉と音を追いつめる作品創りだ。ある日、3日徹夜の遠藤利男が水飲み場で水を飲みながら眠っているという噂を聞いた。見に行くと噂通り寝ていた。遠藤作品は全て「遠藤監督作品」だ。巨匠たちの作品とは月と鼈の差、圧倒的力感があった。遠藤利男を超えるには佐々木昭一郎監督作品を創ることだ…どうするか。一年間に2度、チャンスが来た。しかし失敗作だった。後のない3作目は死に物狂いで創った。

脚本・福田善之は『都会の二つの顔』と題名をつけ、台本は一行も書かなかった。ということは、私に佐々木昭一郎監督作品で行け、ということなのだ。ならば、それであるならば、「佐々木昭一郎監督作品で行くぞ！」。私は映画創りと同じ感覚で出演者を二人選び、《撮影》に入ったのだ。

一人は魚屋の若者。一人は女優志願。台詞は私が書き、出演者には渡さず、囁いた。外ロケ録音。携帯用肩掛録音機（手回しデンスケ）。こうして私は1995年NHKを辞めるまで台本を現場に持って行ったことはない。

ラジオ時代の私は吉永小百合主演、田中澄江脚本『白鷺の飛ぶ日』や『二十歳』を創った（寺山修司作）。星由里子主演の歌謡ドラマは4本創った。きだ・みのる『マルと弥平』も忘れられない。寺山さんが天井桟敷を組織する1966年、氏とは最後の作品『コメット・イケヤ』を創り、テレビに移った。『コメット・イケヤ』『おはよう、インディア』とも寺山さんが《佐々木式》に共鳴してくれた作品で、さわやかな共同作品だ。『都会の二つの顔』は30分。『コメット』と『おはよう、インディア』は45分、と60分版がある。受賞はいずれも60分版だ。今のNHKオーディオドラマ班にもNHKにも上記作品はない。捨てられたのだ。

1980年からNHKを辞めるまで私は一作を除く10作品全てを海外で創った。その間、放送済みのビデオやフィルムやテープは捨てろ、という厳命があった。《川シリーズ》はなんとか保管したが、1985年以後の私の作品も多分行方不明だ。捨てるということをどう思うか、私は遠藤利男に聞いた。遠藤はこう抗議したそうだ。

「素材の中身は一本数千、数百万の予算ですよ。将来はもっと価値が出るかも知れない！」。『二十歳』のテープは吉永小百合さんから頼まれ、懸命に探したが、私のロッカーからも失われていた。

#

「地獄と知りつつパラダイスに向かうがそこも地獄だった。そしてまた向かうのだ」ーーこれが私の一貫性だ。テレビ第一作までは3年かかった。テレビにきて驚いた。古臭い活動映画の方式全て創られている。ここでも正反対の創りをしていたのが遠藤利男だった。彼はラジオ『放送詩集』の中途でテレビに移り、その直後、名古屋に行った。飛ばされたのだ。私のテレビ第一作と第二作は遠藤利男制作だ。『マザー』はNHK初の海外フェスティバル金賞。『さすらい』はNHK13年ぶりの芸術祭大賞。しかし、受賞記念のパーティーは惨めだった。編成局長（後に会長）2作とも気に入らず、社員食堂の一角でコーヒーだけ。御目出とうなど言わず私の目も見ない。以後、3年、私はAD（助監督）を懸命にやり、風待ちだ。3年後『夢の島少女』を創った。こんどは新任の白髪と呼ばれる副総局長に嫌われた。神経症の彼は私の首を切れと周囲にわめいた。もう佐々木監督作品は撮れない…。翌年、『紅い花』を敵の陣地内で撮り大賞とエミー賞を獲った。しかし無駄だった。『ユートピアノ』まで4年、ADに徹した。その間、休暇をとり何度も霧多布、弘前、南郷、などにシナハンに出掛けた。これを機会に家庭など持つまいと決心した。戦えないからだ。遠藤利男がヘッドに戻って来て『ユートピアノ』は採用された。翌年、編集中、遠藤利男は私をレッチェ開催のイタリア賞ラジオドラマの審査員に派遣した。

（つづく。またのチャンスまで）

耳寄り情報

『地域フォーラムin横浜』の討論のうち、『地域がテレビを変えていく』（司会・松尾、石橋、今野、澤田、藤久、村木）および『北海道からの報告と提言』（司会・中田、林、原田、星川保科）、第3部『地域文化と放送』（司会・村上、佐藤、曾根、田中、中崎）は、完全記録しております。何分にも量が膨大なのでメールで事務局宛てに申し込んで下されば会員優先、無料でご便宜をはからいます。

ラジオの広場

放送資料の収集保存と活用を

沖野　暸

放送80周年を前にして、ＮＨＫはＯＢなどに残されている番組テープをもう一度発掘する計画を立てている。

組織的テープの発掘の試みは過去にもあったが、局が「テープ狩り」を進めてきた経緯への不信や保存方針のぶれで一部が失われたという疑いが根強く、必ずしも成功していない。ＮＨＫは今年川口市にＮＨＫアーカイブスを開設し資料テープを移管した。現場からの資料請求に対しては、光ケーブルで送った内容を放送センターで収録して貸し出すのでテープ原本の紛失の恐れはなくなった。

テープの収集にあたって対象の価値を問うのは禁物だが、実際に資料整理をしていると、その価値に疑問を感じることもある。そんな時、仕事をともにした同期の亡友伊神幹さんや後輩の千葉守さんと「それをいっちゃあおしめえよ」と言いあったものだ。

だが膨大な資料の中には思いがけない発見もある。この夏、大阪放送局のＯＢ和田浩明さん提供のＢＫ保存テープリストから、有名戯曲の初演にかかわる「お宝テープ」が見つかった。放送日が古いことに疑問を持ち、初演の日時と照合してその価値を確認したのだが、資料は光の当て方で価値が生まれることを痛感した。

一方、ＮＨＫで『日曜娯楽版』を話題にした時、現役部長クラスがこの番組をほとんど知らなかったのに驚き、この時代は既に解説が不可欠になったと思い知らされた。

それやこれやで保存テープやデータベースに「後世の人々」のための手掛かりを残す試みをしている。ＮＨＫは昭和54年から8年間『ラジオ名作劇場』でラジオドラマの再放送をした際に、毎回ＯＢによる解説を付加したが、デジタル化保存に当たってこの解説も併せてコピーした。データベースにはＮＨＫ年鑑などの記事抜粋を転載する予定。ＮＨＫアーカイブスで公開する作品については、簡単な内容紹介ができるよう短文の作成も進めているが、今後ＯＢに呼びかけて「自選10作品」の紹介文を提供してもらい、データベースにも収載する予定である。

「放送人の会」は横浜の放送ライブラリーなどでテレビ番組の公開やセミナーを行ってるが、私が参加している「ラジオの会」でも同施設で**ラジオドラマウイーク**を開催している。来年4月にも予定している。

保存番組がこうした形で生かされ、アーカイブが市民の支持を得て行くことは、保存資料の動きを勇気づけることにもなる。地道な収集保存と並んで、アーカイブに携わる人々には資料を現代に生かす試みにも力を注ぐことを期待している。

『おーい、ラジオドラマよ』

大和定次

ラジオドラマが、大半の民放から消えて久しくなります。現在、ドラマを常時続けているのはＮＨＫと大阪の毎日放送だけのようです。

私は音響効果マンとしてＮＨＫのテレビはもとより、ラジオドラマも生放送の時代から参加しています。定年卒業後もＮＨＫをはじめニッポン放送など民放数社のラジオドラマに加わりました。しかし参加した民放作品は各局で年間に一本しか作らないドラマで、それもコンクール、芸術祭用や開局周年記念などのものばかりでした。

また「ラジオの会」主催の「全国オーディオ作品セミナー」で、東北、名古屋、大阪、広島にも講師として参加しました。この会で青森放送（ＲＡＢ）の局員と知り合い、この春ラジオドラマ作成に誘われました。この局は「シュウさんと修ちゃんの風の列車」（平成11年）で芸術祭大賞を受賞しています。

今回は「五月の空に子守歌」というドラマです。子供のころ母親から虐待された女性が、ふるさと青森で不思議な幼稚園に迷い込み、魂を救済されるという物語。年間一本ぐらいしか作らないのに専門の局員を置くわけにはいきません。作・演出は青森中央高校の先生。製作は報道のディレクター、ミクサーは情報番組のディレクターといった塩梅。といっても芸術祭大賞の受賞のトリオで備えは万全です。

日常の担当番組の間隙を縫っての制作ですが、その情熱は秀逸です。

効果音の中では私が開発した五円玉二枚で作った「笛」が威力を発しました。作品のテーマの雲雀のコーラスです。これは応援に来た青森中央高校の演劇部の生徒十数人に吹き方を教え、鳴らしたものです。狭いスタジオですが圧倒的な質感で響き渡り、ドラマの音響空間が広がっていきました。

さて私、この秋（03年）キングレコードから「ザ・音職人」というＣＤを出しました。手・足・口、道具を使い「本物より本物らしい究極のアナログ効果音」で構成しました。ラジオドラマなどに不可欠な生音や擬音効果のノウハウを伝えていきたい、そして現代に生かしてもらいたいというのが私の願いと目的です。

『おーい、ラジオドラマ』よ、

年に一度でもいいではありませんか。ラジオの創世期から放送文化を支えてきたラジオドラマは、継続してゆくことに意義があると思うのです。

新刊紹介

梶原しげる『口のきき方』　新潮新書

日本語ブームで学者の分析は溢れているが、放送現場の第一線から発言した書。豊富な体験的事例集から乱れる日本語についての実践論。（680円）

2003年11月幹事会のご報告

日時:2003年11月29日(土)15:00-17:10
場所:広尾・コレド

出席者：大山代表幹事、(以下50音順) 石井清、伊藤、各務、北村充、今野、鈴木典、野崎、久野、松尾、明神、村木　(特別参加) 磯村健二、川口健一、寒河江正、中田美智子　(計16名)

＜報告・議題＞

1．事業関係　(今野)

(1) 名作の舞台裏8『君の瞳をタイホする』(04年2月) 石橋、山田（良）氏で出演者調整中。

(2)『第1回「地域のテレビ番組を語ろう」全国フォーラムｉｎ横浜』(11/11, 12横浜で開催)
(鈴木典)・主催者への報告書（別途・会報でもご報告します）を幹事に配布。
・会計報告は12月幹事会に提出予定。
・番組コンクールへの参加番組テープは返却済み。入賞番組の保存は別途検討。
・関係各方面へのお礼・ご挨拶実施中
(松尾) 来年は地域ブロックごとの「放送人の会」メンバーが連携して方向を論じ合いたい。
また、番組化を含めもっと世の中にアピールして実施したい。
(大山) 会は成果大。横浜市次回から協力を市長約束。スタッフの大変なご努力多謝。来年は事務局も含めて実施方法を主催者間でよく検討したい。

(3) ＩｎｔｅｒＢＥＥ２００３シンポジウム報告…内容のよさに比べて午後の開始も参加者が少ないのを何とかしい。

(4) 人気番組メモリー1『小川宏ショー』(12/7 13:30～横浜放送ライブラリー) 露木茂、堀川氏で準備中。

(5) 放送人の世界　人と作品6『佐々木昭一郎』(04年3月7, 14, 21(日)、横浜放送ライブラリー) …はじめてラジオドラマを聴く日を1日設ける予定

(6) テレビ50周年シンポジウム（テレビは何を作ってこなかったか、これから何を作れるか）…2月早稲田大井深記念会館で予定。吉田直哉、重村一、加藤秀俊、水越伸氏などの予定。

(7) 放送人の証言…11月　遠藤利男・沖野暸氏収録。　「実施ガイドライン」案検討・承認。

2．広報関係　(松尾)

(1) 会報NO.17は12月中旬発行予定、内容は先月提出通り。地域番組フォーラム関連で若干増ページになるかも。

(2) 放送論研究会（野崎）…次回は1/29 、主要論文項目のデータベース化に着手

3．総務関係　(北村)

・事務局でのコピーがすべて有料化（@10.50円)。　将来は複合プリンター／コピーも検討。
・量が多い場合は隣りのコピーセンター@9円をご利用ください。

4．１１月入会会員…井上良介氏（テレビ高知東京支社)

5．その他

(寒河江) 04年度の企画として…地方局の経営者がどういう考えでテレビ局を運営しているか、経営者の文化論を聞きたい。(継続検討)

以上

年賀状　大募集!!　04年甲申のお年賀を会報《新春号》に掲載します。事務局までＦＡＸｏｒ〒にてお寄せください。不問字数。

会員名簿 ：合川 明 青木裕子 赤井朱美 秋田完 新井和子 案楽城 格 有馬哲夫 石井清司 石井ふく子 石高健次 石橋冠 磯野恭子 磯村健二 市岡康子 市橋明子 一色伸夫 伊藤雅浩 井上欣也 岩澤敏 岩下恒夫 上田千秋 碓井広義 歌田勝彦 宇野 昭 生方惠一 浦田彰 江口展之 遠藤利男 遠藤ふき 大蔵雄之助 太田敬雄 大原れいこ 大山勝美 岡弘道 岡崎 栄 岡田晋吉 緒方陽一 小川秀夫 沖野暸 荻野慶人 小田昭太郎 加賀美幸子 各務孝 片岡敬司 片島紀男 勝部領樹 加藤滋紀 加藤静夫 金沢敏子 兼歳正英 金平茂紀 加納孝夫 上安平例子 鴨下信一 河合 肇 川口和久 川口健一 川口幹夫 河崎 勲 川尻順一 川竹和夫 川野楠巳 川平朝清 河邑厚徳、河村正一 岸田 功 北川泰三 北川 信 北出晃 北村美憲 北村充史 木村栄文 木村成忠 楠美 昌 工藤英博 小出五郎 児玉孝光 後藤多聞 近藤 晋 今野 勉 斎藤伸久 斎藤守慶 斎藤秀夫 斎明寺以玖子 寒河江 正 坂元良江 桜井 均 桜井元雄 迫田朋子 笹川紀久雄 佐々木欽三 佐々木彰 佐藤利明 佐藤 年 沢口真生 澤田隆治 重延 浩 静永純一 渋谷康生 島野功緒 清水 満 下川靖夫 下重暁子 習田 豊 城 菊子 菅野高至 杉澤陽太郎 鈴木昭典 鈴木道明 鈴木紀郎 鈴木典之 須磨章 せんぼん よしこ 高尾正克 高島秀之 高橋一郎 高橋啓 高橋 泰 滝 大作 武田光弘 武谷雅博 田澤正稔 只野 哲 田中昭男 田原英二 田原茂行 千葉 勉 露木 茂 鶴橋康夫 土居原 作郎 戸崎春雄 戸田桂太 外崎宏司 土門正夫 中川幸美 中島 僚 中田美知子 中谷英世 中津川 輝夫 長沼士朗 長野克亮 中村克史 中村季恵 中村耕治 中村芙美子 難波秀哉 西田善夫 丹羽美之 根津武夫 野崎 茂 野田宏一郎 萩野靖乃 橋口義春 林 勝彦 原田庸之助 原 由美子 久野浩平 備前島文夫 一杉丈夫 福田雅子 藤井 潔 藤井卓雄 藤井チズ子 藤代勝博 藤田晋也 藤田道郎 藤久ミネ 星田良子 堀川とんこう 松浦幸一 松尾羊一 松田輝雄 松平定知 松前洋一 松本 明 松本 修 松本国昭 三上 章 水上 毅 水野憲一 満島保夫 三村景一 三村千鶴 宮脇厳雄 明神 正 村上紘一 村上雅通 村上佑二 村木良彦 銘苅栄昌 桃井 章 森川時久 矢島良彰 藪内広之 山県昭彦 山崎隆保 山崎裕 山路家子 山田良明 山田 尚 大和定次 山名光紀 山根基世 山辺麻未 山本恵三 山本隆則 湯浅和憲 横山英治 吉永春子 吉村直樹 吉村 誠 和田智允 和田洋一 上野 満 (新)井上良介 深町幸男 児玉久男 和田光弘 (2003・11/10現在)

お悔やみ 相川 浩さん

相川さんは放送人の会が発足した当時からの会員でした。お体の不調から退会されておりましたが、さる十一月二十七日、肝不全のため永眠されました。享年七十歳。相川さんは五十七年にNHKに入局し、名アナウンサーとして『お国自慢にしひがし』『思い出のメロディー』の名司会、なかでも『日本百名山』はふくよかな言葉が印象的でした。 ご冥福をお祈りいたします。

放送界多頻語事典

ヒマジンハウス社 刊

ピーカン… 遠足前夜のガキは「あした天気になーれ」と祈ったものだが、ドラマ班ロケ組も同様でドシャ降りだと深刻。撮影中止で喜ぶのは役者さんやスタッフで、早速雀卓を囲むが、Pは電卓相手でかさむロケ予算に青息吐息。「あした天気で金おくれー」と天を仰ぎ、ひたすらピーカン待ちとなる。

ズラ… 〔助動・接尾〕駿河方言。(例)＃きゃあるが鳴くから雨ズ〜ラァ〜ヨ(ちゃっきり節)(転)かつらの演劇・テレビ界の隠語。ハゲの拡大に悩む中年タレントは植毛メーカーに頼るのだが、果たして地毛か仮毛か、それが問題だと女性週刊誌筋はしつこい。

サイマル…「サイマルでいこうや」とはラ・テ兼営局用語。テレビ番組の音声を流用してラジオで二次使用する。転用自在な「二度おいしい」商法。度が過ぎると手抜きだと批判される。

てれこ… 語源は歌舞伎。放送界では例えば男アナに配する女性サブアナの二人を一日おきに使うこと。日替わりで女を変えるのはテレコ・ナンパと言うが(言わないって)資金が続かず結局両方からフラれるのが落ちである。

◇03年 放送人詩歌合集拾遺◇

(元歌)かくすればかくなるものと知りながら やむにやまれぬ大和魂

(とは吉田松陰。平成時代に読めるは)

かくすればかくなるものと知りながら やむにやまれぬ 視聴率魂 喝ッー

(鳶蛾蝶)

編集後記

◆10月、11月の事務局はまるで戦場。地方局からコンクール応募VTRテープが殺到し横4列に並べ審査ナンバーを付け、テーブルにモニター用器材が入り、一次審査員用椅子を増設、連絡電話、書類プリント作成、頭越しに打ち合わせする者、その隅で屈みながらPC&WPを打つ者あり。なんだかUボートの艦内で月月火水木金金的気働きで総勢7、8人が常時籠もるもんだから当然酸素不足気味となる。それでも禁煙とはならず、廊下に緊急避難者続出。

◆酸素不足は人間様だけではなかった。岡崎栄さん寄贈のPC(IBM)も気息奄々。只働きに憤ったのかサボりはじめた。マウスはよろよろ、キーボードの動きものろのろ、遂にグロッギー。なんとか北村(充)さんがなだめすかすと、PC君は渋々と運転再開したが。

◆編集部近況。某日、わが草野球ホラーズ軍はエース佐々木昭一郎を擁し東海林さだお麾下の早大漫研OBチームと秩父に恒例合宿。「七色村」の剛軟投げ分けるもエース連打を浴び「紅い花」と散る…したがこの人ジム通いで来年は大化けすると。いやもう化け物です。こっちは既にリタイアだもの(松尾)

☆ 小春なり初孫抱きて落ち葉踏む

(伊藤雅浩翁の心境推察句)

◆事務局は12月29日〜9日までお休みです◆